

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1090500115	
法人名	特定非営利活動法人 サポートハウスよろこび	
事業所名	グループホームほたるの里Ⅱ	
所在地	群馬県太田市新田大根町266番地3	
自己評価作成日		評価結果市町村受理日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人群馬社会福祉評価機構	
所在地	群馬県前橋市新前橋町13-12	
訪問調査日	令和4年8月29日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>天気の良い日には、近隣の公園や敷地内で外気浴や散歩して気分転換を図ったり、入浴や排泄においては、個人の状態に配慮して支援することで、不快を感じさせない介護支援を行なっている。</p> <p>また、コロナ禍のため、施設内(敷地内を含め)で季節を感じられるような行事を行なっている。</p> <p>家族との関係については、コロナ禍で、利用者と家族が、接触出来ないため、情報提供及び共有は、密に行なっている。</p> <p>職員については、介護技術の向上を目的に、研修会の参加や施設内での勉強会を実施し、利用者及び家族が安心して日常生活が送れるよう日々取り組んでいる。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>代表は、理念の実現を目指して、職員の育成と組織づくりに力を注いでいる。認知症の理解を深めることで、利用者の見ている世界に共感する姿勢を養うようにと、職員に専門書を配布したり、法人の考えを全職員に伝える為の機会づくり(幹部会議・全体会議・ホーム会議)に取り組んでいる。また、個々の職員の意見を代表自らが吸い上げられるようにLINE(コミュニケーションツール)環境を整えている。利用者に複数の職員が関わることで、職員との個々の関係性から得られる情報を支援に活かしている。敷地内に訪問看護ステーションを併設して看取り介護を提供し、法人が運営する小規模多機能施設やサービス付き高齢者住宅を活用して、サービスの提供に努めている。コロナ禍で地域との交流が制限されるなか、地域への発信力を更に高め、相互協力の関係を築きたいと考えている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念をホーム内に掲示し、毎朝の申し送り時に職員全員で読み上げている。 また、月1回の幹部会議、全体会議で理念の共有を図っている。	代表は、理念である「笑顔と思いやり」をもとに、職員が認知症を理解したうえで、1日1回すべての利用者の笑顔を引き出すように伝えている。入職後はプロフェッショナルとして従事するように指導し、認知症を理解するための本を配布したり、理念を唱和したりして、実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ前は、地域内で行なわれている敬老会、清掃活動等に積極的参加していた。 利用者の散歩時には、地域の人に挨拶を交わし、日常的な交流を図っている。	コロナ禍で地域との交流が途絶えているが、散歩時に行き交うことがあれば、挨拶を交わしている。地域の困難事例解決にむけて出向いたり、法人として利用者のために図書館を利用したり、電話相談を受け付けたりしているが、今後はさらにその活用にむけて検討していく考えがある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護について困っている人の電話相談を随時受け付けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議で話し合った内容を職員会議で伝達し、介護力向上に努めている。	コロナ禍以前は、2ヶ月に1回開催してきたが、現在は会議開催を中止し、メンバー全員に会議資料を配布している。意見欄を設けて意見を聴取し、取り組み状況を報告している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に市町村の職員にも参加して頂くことで意見交換を行なっている。 (現在は、コロナ禍のため、書面で情報共有。)	地域包括支援センターや市の生活保護担当からの相談に対応し、地域の困難事例解決にむけて取り組み、市、自治会長や民生委員との関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の鍵は、日中は施錠していない。 利用者が外に行きたい時は、見守りで対応している。	身体拘束をしないことを基本としており、現在は、検討が必要な利用者はいない。言葉による拘束にならないよう、日頃から感情的にならないように注意し、そうした場面がみられた時には代表や管理者が直接注意し、職員教育に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	コロナ前は、研修に参加していたが、現在は、県の情報を通じ、過去の研修受講職員を中心に定期的な研修の場を設け、虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	職員間で学ぶ機会を設け、情報の共有を行い、活用できるように支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時はもちろん、解約時も十分な説明を実施し、利用者及び家族に理解・納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に一度アンケート調査を行ない、外部者も構成員となっている運営推進委員会で報告し、運営に反映させている。	月1回、管理者やケアマネージャーが状況報告する機会に、家族からの運営に関する意見を聴取している。過去には、年1回アンケート調査を行っていた。コロナ禍の中、家族の意向もふまえて、感染対策を講じながら面会ができる工夫を重ねている。	コロナ禍で直接家族と会える機会が少なくなっている中、過去に行ったアンケート実施を再開するなど、更に家族の意見を運営に反映できる機会づくりに期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の幹部会議、全体会議を開催し、業務内容の改善及び職員の意見、要望等を運営に反映させている。	グループホーム会議・全体会議・幹部会議で職員の意見を吸い上げ、法人としての考えを伝えている。また、全職員が代表とラインで繋がり、直接意見を伝えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の意見、要望等を定期的に聞き取り、運営に反映させている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	段階に応じて、法人内外の研修を受講している。 研修後は、研修報告を兼ねて勉強会を開催し、職員のレベルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との情報交換で知り得た情報を職員間で共有し、施設内での事例として発表、検討し、サービス向上に繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所に際し利用者と面接を行ない、不安を取り除き、安心して入所できるよう対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前に利用者及び家族から要望等を十分に聞き取り、信頼関係構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者及び家族と十分に話し合い、必要な支援やサービス利用の提案を図っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩ととらえ、全員で学び合い、共に良い関係が築けるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	訪問時には、現状を細かく説明し、家族からの要望等も聞き入れている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	帰宅願望があるときは、家族等と相談のもと柔軟に対応している。 入所前の対人関係及び趣味等は、できる限りサポートしている。	家族と墓参りに出掛けたり、花壇の花に水をあげたり野菜を収穫したりと、これまでの生活の流れを継続できるよう、職員が声掛けを行い、一緒に活動できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの利用者の性格や行動を把握し、感染防止を図りながら、食事等を一緒にとるなどの支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後の相談等も気軽に出来るよう、利用者及び家族に説明している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン策定時、本人の意思を確認し、日々のふれ合いの中で、何を求めているか常に把握している。	複数の職員が関わって話を聞くことで、利用者の話しやすい環境をつくり、それぞれの思いを引き出している。また、入浴や排泄などの支援においても、本人の気持ちを皆で検討し、本人にとって負担にならない対応方法を検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時の聞き取りや入所後の本人及び家族とのやり取りの中で、生活歴の情報を共有できるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の希望を伺いながら、好まれてとる行動、残存能力の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人及び家族と話し合い、職員も交えながら、個々の特性に沿った介護計画を作成し3ヶ月に1回のカンファレンス、月1回のモニタリングを実施している。	介護計画作成においては、これまで支援してきた医療や介護の専門職、家族や友人などから情報を収集している。主に利用者の疾患について調べ職員間で共有して、支援に活かしている。	事業所での暮らしを支援するために、利用者の思い、その背景であるこれまでの生活の様子を十分にアセスメントし、関係者の意見が反映される介護計画となるよう期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に基づき記録の経過観察が出来るよう情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅への外出、理美容店の利用、外食等家族と話しながら希望に応じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	図書館等の利用、地域自治体との交流等支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は、本人のかかりつけ医院で受診ようとしている。 また、月1回の定期訪問診療のもと日頃から体調の把握に努め、家族にも早期に報告している。	事業所の協力医の往診を希望するのか、これまでのかかりつけ医の受診を継続するのかを選択し、協力医の場合は2週間毎の往診で、かかりつけ医を継続する場合には家族の同行受診を基本としている。利用者の状態から処方薬を医師に相談し、適切な服薬管理が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと連携をとっており、気になる点については、看護職員へ報告し、対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には、認知症による行動障害の旨も報告し、早期治療へ望めるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に、家族と終末期について話している。 また、往診ドクターや職員とも意思の連携をとり、看護体制を整えている。	訪問看護ステーションを併設し、緩和ケアを中心とした看取り介護を提供している事を説明している。状態変化がみられグループホームでの生活が適当でないと判断された場合には、関連施設への転居や別法人施設、医療機関への選択肢も伝え、意向に沿った対応を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の救命研修を受講している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回消防署指導のもと避難訓練を実施している。	年2回、昼夜を想定した避難訓練を実施している。避難場所を敷地内から敷地外に変更し、区長や民生委員に協力を依頼している。災害発生時には代表から職員へ一斉に連絡が行われ、関連施設と協力し対応することとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者に対し、丁寧な言葉遣いと態度で接し、全職員が権利や人格の尊重に努めている	利用者の見ている世界を受け止め、共感することがその人を大切にする、尊重することと捉えている。職員の何気ない言葉や口調が利用者の不穏のきっかけにならないよう、職員同士が気付き合い、注意し合える関係づくりに努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	各利用者の現状能力に応じた自己決定が出来るよう、努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各利用者のレベルに応じながら、それぞれの今までの生活習慣を尊重し、支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に応じた服選びや清潔を心掛けたアドバイスをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員も共に同じテーブルで同じ食べ物をコミュニケーションでとり、食事をとっている。 また、利用者のレベルに応じ準備や片付けなどをおこなっている。	調理担当の職員が、献立と調理を行っている。お米にもこだわり、おいしい食事を味わってもらえるよう努めている。毎月、うどんの日として職員が手打ちうどんを披露したり、利用者の好きなお好み焼き、ラーメン、バーベキュー等を提供したりして、楽しめるよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食を楽しむ栄養摂取が出来るよう支援している。 食事量、水分量は状況に応じて提供し、その都度記録している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアの他、うがい薬を使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレの声かけを行ない、摘便排泄を促している。 また、トイレの排泄が続けられるよう、下肢筋力の低下予防に心掛けている。	トイレで排泄することを忘れないように、失敗して不快な思いをしないようにと、2時間おきに声掛けしトイレへ誘導している。トイレ排泄の理解ができない方に対しては何とはなしにトイレへ誘導し、不穏な気持ちにならないようにしている。ホール内を歩いたりして、下肢筋力低下の予防に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	頻繁に水分補給を促したり、体操やレクレーションを通じて、便秘対策を行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週3回の入浴を基本としている。利用者の希望や体調を考慮しながら、入浴剤を入れる工夫をしている。	週3回の入浴を基本とし、その人の気持ちに配慮しながら無理強いせず回数調整したり、清拭に替えたりしている。また、それぞれが好きな香りの入浴剤やボディシャンプーを使用して、入浴を楽しめるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	希望者や体調不良の利用者には、日中休息をいただいている。 また、利用者の生活習慣に合わせた就寝を支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各利用者の薬の確認を行なったうえで、手渡し服用出来たか、見守り確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	折り紙や貼り絵作成、レク体操、読書やクロスワードなど、本人の好みに応じて楽しんでいただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	職員と一緒に散歩や買物等を行なっている。 また、家族とともに家に戻り、食事を楽しまれたりすることもある。	何をしたら楽しめるのかと考え、近隣の公園で散歩をしたり、庭園でひなたぼっこをしたり、おやつや花火をしたりなど、外気に触れる機会を多く作れるよう工夫している。また、小人数でお花見にも出掛けている。外出の要望にできるだけ応えたいと考えているが、コロナ禍のため、行き先を変えるなどして対応に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりお小遣い帳で管理している。買物に出かけた際には、自分で支払う機会を設けている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時に、電話をしたり、家族からの電話の取りつぎをしている。 また、季節の移り変わりの時などには、家族と手紙でやり取りできるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関や廊下などに花や写真、自分で塗った水彩画や張り紙を飾り、家庭的な空間を作っている。	庭の手入れを専門に行う職員を配置し手入れされた庭には、利用者がいつでも外気浴を楽しめるようにテーブルと椅子を設置している。居間は窓からの光が入って明るく、テレビの前にはソファが置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビを見たり、新聞を読んだり各利用者が思い思いに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、写真や私物の家具などを置き、本人が居心地よく過ごせるようにしている。	居室には、各自が使い慣れた物を持参している。居室で過ごすことを好む方には居室でテレビを観るなどして過ごしていただき、ベッドの利用を好まない方には布団で休んでいただいたり、それぞれが居心地のよい環境で過ごせるように配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下は広く、車いすでもスムーズに通ることができ、トイレにも手すりが設置しており、安全に考慮し、自立支援を行なっている。		